

図書紹介

Jayawickrama, N. A. (tr.). *The Sheaf of Garlands of the Epochs of the Conqueror being a translation of Jinakālamālipakarāṇam of Ratanapañña Thera of Thaliand.* (PTS Translation Series No. 36), London: Luzac & Co., 1968. xlvi+235 pp.

本書は、スコタイ史々料として知られる Jinakālamāli の初の英訳である。(これまで Jinakālamālinī と呼ばれていたが、語末の nī は、「この」を指す指示形容詞であるから、誤用というべく、Jinakālamāli が正しい。v. xxxvi) 1923年に発表された G. Coedès の仏訳は、後半のみの部分訳であったから、本書は、この史書の西歐語への初の完訳である、といえよう。

Jinakālamāli のパーリ語原文から、タイ語への翻訳が、すでに1794年、現バンコク王朝の創設者、ラーマ1世王の勅命により、Phra Wichien Prichāら、5人の学者によって試みられ、1908年、原文とともに出版されていることはよく知られている。1939年には、Sathien Phantharangsī による改訳があらわれ、さらに1958年には、地名・人名の比定に新研究の成果をもちこんだ、Saeng Manawithūn による新訳が発表され、1923年の Coedès の訳業以来、ほとんど進歩をみせなかった Jinakālamāli 研究が大きく一步前進したのであった。(1956年に Ven. A. P. Buddhadatta Aggamahāpaṇḍita によるシンハリ語訳が出版されているが未見)

1962年のパーリ語テキストの出版に引き続き、今回、Pali Text Society によって、諸研究の成果を充分にとり入れた英訳完訳が公にされたことは、タイ史研究に寄与するところ大なるものがある。とくに、1958年のタイ語新訳の訳者である Dr. Saeng および、かねてより、Jinakālamāli の科学研究の必要性を力説してきた Dhanit Yupho 前タイ国芸術局長が、翻訳に全面的に協力していることのメリットは、タイ史にあらわれる地名・人名の

新しい比定が豊富に盛りこまれた脚注の中にはっきりとあらわれており、この訳業の価値を高からしめている。巻頭におかれた Dr. Saeng の論文“Some observations on the Jinakālamālipakarana”は、タイ国における Jinakālamāli 研究の水準を示したものとして、注目に値しよう。Jinakālamāli は、これまで、もっぱらスコタイ史々料として利用されて来た (Damrong: 1914, Coedès: 1917)。しかし、著者 Ratanapañña Thera の、スコタイ史にかんする知識が、アユタヤ史についてのかれの知見とくらべ貧弱であることは、すでに Prince Damrong によって指摘されているところであり、スコタイ史々料としての価値は、それほど高いとは言えない。本書の真価は、むしろ、著者の故郷であるランナータイ史、とりわけ、ランナータイへの上座部仏教弘通の歴史にあり、この点、史料価値の再評価が行なわれてしかるべきであろう。この訳業の出現によって、これまで顧みられることの少なかった、北タイ史、および、北タイ仏教史の研究が、新しい展開を示すことを期待したい。

(石井米雄・東南ア研)

Phya Anuman Rajadhon. *Essays on Thai Folklore*, Bangkok: The Social Science Association Press of Thailand, 1968. ii+383 pp.

本書は、タイ国の「柳田国男」とも言うべき、タイ民俗学の泰斗、アヌマン・ラーチャトン博士の英文著作集である。この一世の碩学は、タイ国史改訂委員会の委員長として、世紀の大事業である「タイ国百科辞典」の総編集者として、また、チュラロンコン大学の言語学、比較文学、タイ民俗学の教授として、おとろえを見せぬ学的活動を続けていたが、本年7月1日、午前8時50分、トンブリにあるシリラート病院の一室で、多彩な生涯の幕を閉じた。昨年12月、80才の誕生を祝ったばかりであった。

本書はアヌマン博士80才の誕生日を記念して上梓

されたものであって、収録された22編の論文はどれも *Journal of Siam Society* 誌上に掲載されたり、*Thai Culture Series* の一つとして刊行されるなど、いずれも既発表のものばかりであるが、その中には一般の読者の目に触れにくいタイ週刊紙に掲載されたものも含まれており、これが今回一書にまとめられたことは、利用者を益するところ大であろう。

全編は、「文化」、「言語・文学」、「民話」、「仏教関係」、「各種儀礼」の5編に分かれ、巻末に、William J. Gedney 訳の“The life of the farmer”が付されている。

内容をみよう。

I. 文 化

1. タイ文化の手びき
2. タイ国の諸文化
3. タイの伝統的文化
4. ローイカトン祭

II. 言語文学

1. タイ諸文化の伝播とタイ文学
2. タイ文学
3. サワディ・ラクサー考
4. タイ語の性格と発展
5. タイ語

III. 民 話

1. タイ民話研究
2. 毒菓 (yāsang) 考

IV. 仏 教

1. プラチェディ (仏塔)
2. ジャータカ説法 (Thēt Mahāchāt)
3. 伝統的な敬意のあらわし方

V. 各種儀礼

1. 豊作祈願儀礼
2. クワンとその儀礼
3. タム・クワン儀礼
4. タイの婚姻慣習
5. タイの護符
6. チャロック占い
7. 植物に関する迷信

付録 “農民の生活”

アヌマン教授の、タイ語による業績は、御本人も mai khoei nap(数えたことがない)と言われるほどの膨大な量に及ぶ。本書はその一端を示すにすぎな

いが、およそ、タイの伝統文化について知ろうとする者が最初にひもとくべき書物と言ってよいであろう。

1958, Cornell 大学 Southeast Asia Program, Data Paper の一冊として刊行された *Five papers on Thai custom*, HRAF から出た *Life and ritual in old Siam; three studies of Thai life and customs*, New Haven, 1961. (内容は一部本書に再録) とならんで、今回本書が世に出たことは、この不世出の大学者の業績に親しむ層を、さらにひろげる役割を果たすものとして歓迎したい。

(石井米雄・東南ア研)

Asmah Haji Omar and Rama
Subbiah. *An Introduction to Malay
Grammar*. Kuala Lumpur: Dewan
Bahasa dan Pustaka, 1968. pp. 154 +
xii.

本書はマレーシア人が英語国民に対して書いた文型タイプのマレー語教科書の最初ではないかと思う。Asmah 女史はインドネシア大学学位を持つ新進の国語学者で、サラワクの原住民の言語の調査なども行なっている。Rama Subbiah 氏はロンドン大学博士号を持ち、現在マラヤ大学のインド研究科で教鞭を取っている。

内容は2部に分かたれる。第1部は21課のレッスン、第2部は15編の新聞・雑誌からの抜粋である。

各レッスンは、文法的説明と練習と語彙の3部に分けられている。文法的説明の大きな特徴は、従来のマレー語では試みられなかったパターンを設定していることである。マレー語をどこまでパターン化し得るかということで興味をもって読んだが、テキストとしての性格が強く、便宜的なパターンであったので、その点は失望させられた。文型としてあげられているのは、N(nominal) n (nominal) (これは dia mahasiswa のように名詞を二つ並べると繫辞がなくとも文になること)、N₁(subject) A (adjective), N₁V (verb), N₁VT (time word/group), N₁VL (locative group), N₁VN₂ (direct object), N₁VN₃ (indirect object) N₂, N₁VN₄ (locative object) で、この変形として N₁VT は